氏　　名		須貝　旭
学 位 の 種 類		博士（美術）
学 位 記 番 号		博美第 21 号
学位授与年月日		令和２年３月２５日
学位授与の要件		学位規則第４条第１項該当者
題目	学位論文題目	銀箔の特性を応用した絵画 ―「時間を可視化する」ための方法論―
	研究作品題目	1.《frame (since December 2018)》 2. 《still-life (since November, 2019)》
論 文 審 査 委 員		主　査　教　授　倉地　久 副　査　教　授　阿野　義久 副　査　教　授　額田　宣彦 外　部　国立民族学博物館・総合研究大学院大学 審査委員　名誉教授　森田　恒之

１　学位論文の要旨

従来の絵画は「変化しない」ことを前提とした。画家や蒐集家は、絵画のイメージが半永久的に同じ状態で保たれることを望んだ。しかし絵具を始めとする画材は経年変化で変褪色を起こす。その進行はごく緩やかで、通常では変化に気づくのにかなりの長期間を要することもある。

筆者は、この変化を人為的に加速し、強調してみせることで、作品を見る人に時間の経過を意識させることを考えた。あえて経年変化に敏感な素材を使い、ゆっくりではあるが限られた期間で見かけの変化が確認できる作品をつくることを試みた。本論は、そのための試行と検証の記録であり、思考を絵画表現に結ぶための方法論の検討である。

１章では、過去の自作を振り返り、本研究テーマを導くまでの経緯を述べた。制作にあたり主たる素材として銀箔を選んだ。銀箔は酸化や硫化によって容易に変色する。この性質上、完成後も作品の見た目が変化するという問題に直面した。従来の絵画の前提に反し「変化する」絵画は、表現として成立するのかと疑問を抱いた。

発想を転換し、錆びて変色する銀箔の特性を肯定的に受け入れ、視覚効果として活用したいと考えた。腐食によって絶えず変化していくイメージを作品として提示することで、時間が流れているという状態を示すことができないか。

２章では、「絵画の中の時間」という観点で平安絵巻から現代絵画まで計７点を取りあげ考察した。物語絵における異時同図法による時間の経過表現、17 世紀以降の技術革新を背景にした新たな時間感覚に基づく動きの瞬間を捉える方法、20 世紀後半の現代絵画による作者が制作に関わるなかで得た時間の自覚などを検討した。

自作は上記いずれとも異なる。表現に用いた銀箔の経年変化によって、表現したイメージ自体をも変化させることで、時間の可視化を試みる。ただし、銀箔の腐食は作品の劣化や崩壊を意味しない。耐久性が保障された古典絵画技法に則り準備した支持体の上で、作品表面の見かけのみを変えていくことを意図する。

３章では、自作で重視する銀箔の表現要素を、「光沢面」「正方形」「腐食」の３点に絞り込み、各要素と関連する先行作品を考察した。

「光沢面」では、日本の障壁画にみられる銀箔と銀泥の使い分け方、15 世紀油彩画のグレーズ技法による透明層の重なりが作り出す光沢効果を検討した。「正方形」では、素材の既製の形を視覚効果として活用した例としてモザイク画、黄金背景テンペラ画、金碧障壁画を比較した。「腐食」では、銅が錆びて変色する性質を描画技法として用いた作品と、耐腐食性のある鉛を使うことで内部に時間を封じ込めることを意図した作品を考察した。

４章では、自身の方法論確立のため基礎実験を行い、その結果を検討し必要な修正を加えた上で、絵画作品を制作した。

自作では、数年から数十年を視野にゆっくりと進む変化を確実に見せることを考えている。腐食剤として当初は硫黄を含む市販の銀工芸用「いぶし液」を用いたが、予想以上に反応が早く望んだ効果が得られなかった。そこでリンシードオイルとその加工品を試みたところ、乾性油の緩やかな酸化に伴い銀箔の表面に徐々に錆のようなものが現れた。銀箔の上にアクリル絵具やワニスであらかじめ防蝕加工しておけばこの変化は抑制できる。防蝕層の厚みや施工方法でも見かけの変化は制御できる。しかし制作時環境のわずかな差異も結果に影響するので細心の注意を要する。実験の結果、乾性油と防蝕膜の組み合わせによる腐食技法を「時間を可視化する」ための一つの方法論として採用し、《frame(since December, 2018)》を制作した。

「時間を可視化する絵画」は、物質の経年変化が作る見かけの変化を、絵画作品として現在進行形で更新し、絶えず新しいイメージを提示することを目的とする。作品と向き合う観者は、作品が物質として経てきた/経ていく時間の中で、更新してきた/更新していくイメージの「いましか見ることのできない一瞬の姿」と向き合うことになる。それにより、いまここに流れている時間の存在を意識してほしい。自作は、絶えず流れていく時間の中で、物質・イメージ・観者（＝作者）という三軸の交差によって「いまこの瞬間」という一点を示す絵画である。

２　学位論文審査の要旨

絵画は、画家が最後の筆を画面から離した瞬間から見かけの変化が始まる。一般に槌色、変色と呼ばれるが、その変化は極めてゆっくりしたもので、変化に気付くのは数十年後ときには１世紀近くのちになることも稀ではない。申請者・須貝旭（以下、須貝と表記）はこのわずかな変化を人為的に加速、増幅することによって、画家自身の眼で確認できる時間の範囲内で画面にみかけの変化を生じさせることによって、時間の経過を表現として利用するとともに鑑賞者とも共有することを意図している。

須貝は、時間の表現を追及した先行研究（作品）として物語り、絵に描かれた事象の順序表現、印象派以降の近代絵画が追及した動きの瞬間を捉える方法、20 世紀とくに後半のいわゆる現代絵画が試みた画家が制作にかかわる時間の自覚などをとり上げて検討したうえで、自らの意図は、通常では見過ごされがちな絵具を含む画材の経時的な物質変化を活用して、時間の経過という無態の事象を視覚的に顕在化させることである、という。

この目的の達成のために、須貝はテストピースを使ってさまざまな基礎的実験を重ね、その結果を応用実験としての研究作品に結実している。

方法として、須貝は銀箔を主たる素材に選んだ。材料の扱いやすさ、画家としての色の

好みに加えて、銀は酸化、硫化などの化学反応によって変色しやすく、視覚的な変化が容易に得られるからである。また銀箔は類似の色味を持つスズやアルミニウム箔より柔軟でより膜厚の薄い製品を市場で得やすく、箔を施す麻布（カンバス）や和紙を張ったベニヤ板など支持体の表面形状を絵画の表現効果として生かしやすい利点がある。

須貝は、自製の油/水性エマルシオン絵具を接着剤として市販の銀箔で被覆加工した支持体の表面にあらかじめ部分的な防蝕加工を施し、様々な腐食剤を用いて人為的な変色を操作した。防蝕加工の手法としては複数の試行をへて、シルクスクリーン印刷が最適との結論に達した。この方法によると、印刷条件を固定すれば一回の加工によって得られる保護膜の層厚がほぼ一定に保たれ、膜の乾燥を待って重ね刷りをすることで比例的に層厚が異なる膜が得られる。

さらに保護膜形成材料として尿素の使用を試みた。尿素で厚さの等しい膜の形成は困難であるが、金属を腐食せず金属面への顆粒状での付着が容易であるので腐食防止効果は十分に得られることがわかった。尿素は空中の水分を吸収して毛状もしくは芽状の生成物を作るので金属の表面保護とともに、副産物として画面に微妙な 3 次元効果を生むことにも注目した。ただし尿素は潮解性があるので腐食保護、3 次元効果の維持に限界があるが、当面の時間経過の可視化には十分有効である。

腐食剤として、須貝はイオウ化合物と乾性油を選んだ。最初はイオウ化合物を主成分とする市販の金属いぶし液を水で希釈し、濃度の異なるものでいろいろ試みた。いずれも予想する以上に反応が速く、期待する効果が十分にえられないので、アマニ油とその加工品（サンシックンドオイルとスタンドオイル）を試みたところ、緩やかではあるが目的に近い効果が得られることが分かった。これらの油性膜の塗布回数を変えることによっても十分に変色の差が得られた。原因は乾性油の酸化に伴う金属箔表面の還元反応か油の酸化重合に伴う不均一な効果膜の形成によるものかは未確認である。

須貝は、こうした基礎実験を通して得られた結果を、ときには基礎実験と並行して、絵画表現に適用した作品を制作し、途中経過を詳細に検討し必要な修正を加えている。須貝が意図する、絵画作品に従属する時間の可視化は数十年を単位とする時間で生じる変化を数年に短縮して、より分かりやすく、かつ美しく見せることであるが、限られた博士課程在学期間では十分な実験結果を得て適切な結論を得ることは困難である。しかし、その限られた時間内に、明確な目標点の確立、そこに到達すべき方法（実験を含む）とその中間過程での検証方法を十分に獲得していることは、提出論文の随所に見受けられる。

研究作品は、額縁、鶏などのカタチを、銀箔を張った画面上に防蝕剤を駆使して表出し、時間の経過と作品が置かれた環境条件の組み合わせの中で、ゆっくりと画像が顕在してくるものである。2 カ月前の予備審査時点と本審査時点では、わずかではあるが見かけの変化が十分に見てとれる。美術作品としての表現力とともに、制作意図は十分に伝わっている。

発表展示された《still-life》シリーズでは 17 世紀にオランダで流行した狩猟画を題材にしている。当時の画家が狩猟を主題に獲物となった動物を台所や庭先に並べて描いたものである。油彩の中で殺され死を迎えたはずの動物が毛並みや濡れ感など生き生きと描かれ、まるで生物のようでもある。しかし静物として描かれた生き物は死物であり只の物体である。作者はこの生と死、生物と静物による相対的な関係を、変化＝生・生物：止め

る＝死・静物という意味に転換させ、乾性油の変化、箔面の反応をこの主題にリンクさせている。少しコントラストを上げた狩猟動物の図像を、アルミナホワイトと透明メディウムを摺刷インクにしてシルクスクリーンで摺り上げる。それらが目止めとなり、上層に塗布される乾性油や尿素に作用の差が出来、時間と共に変色する仕組みである。新作の特徴である尿素を使用した作品は、変色が早すぎる燻し液より反応を遅くすることで、じっくり時間をかけて制作できる作業効率性や表現における行為の作為性を高める目的がある。特に新作の 300 号サイズの大作《still-life(since November, 2019) chicken,birld》は、中央につるされた食用の鳥（鶏）がモチーフであり、尿素が持つ独特な毛状もしくは芽状のような白色が、上記の画像、箔や乾性油の反射や艶、インクの白色などの光と色彩が様々に集積し、わずかに見える画像と重層的に絡み合う優れた平面作品として結実させている。そして、集積の隙間から見える箔面が乾性油に作用され、やがて時間経過とともに起きる僅かな褐色化を生みだすことは、この論文からわかるように、安易に予測できる。

以上のように、須貝はこの論文及び作品において、博士の基準を十分に満たすことを示した。

３　最終試験結果の要旨

論文口頭発表に関しては、申請者・須貝旭（以下、須貝と表記）の論文・作品・口頭発表等に基づき、最終試験（口頭発表・質疑応答）を実施した結果、研究全体として非常に高度なレベルで研究が行われていると全審査員が高く評価した。絵画における「時間」の定義に言及し、それを「可視化」することを実践する内容は、経年変化と保存という美術品の価値のあり方そのものにも触れながら、抽出された先行例や膨大な実証実験から検証し、論文や自作品としての絵画表現へ結実させている。作品や表現の説明に留まらず、工程そのものを結論に繋ぐ方法に特徴があり、実証性や独自性が非常に高い。口頭発表では、全体を通して解りやすい論文の骨格を説いた内容であり、論文同様に、テーマ・目的・手段・結論で構成され、限られた時間内で第 1 章から第 4 章までの概要をわかりやすく伝えることができている。特に 3 章から 4 章にかけては、時間の可視化：変化：美術の不変的価値：自己作品の関係性、そして結論へとつながる重要な内容に重点を置き、テーマの根幹になる時間の可視化については、図やフローチートを効果的に使用し、構築的な論述もさることながら、より直観的に理解できるようにテーマや内容を伝える努力を形にしている。話し方の活舌もよく、音量やスピードなども、絶えず相手への伝わりやすさを意識した進め方を重視し、効果的な口頭発表となっている。

質疑応答に関しても、内容に対しての肯定的な意見が多く、質問に対しても的確に返答している。

以上の理由により、最終試験において、須貝は、論文口頭発表や質疑応答からわかるように、優秀な成績を示し、優れた発表であると結論づけた。この成績は、博士の学位を与えるに十分であった。